

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01636

研究課題名(和文) 変化の担い手としての教師 拡張的学習への活動理論的介入研究

研究課題名(英文) Teachers as change agents: An activity-theoretical intervention research in expansive learning

研究代表者

山住 勝広 (Yamazumi, Katsuhiro)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50243283

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「文化・歴史的活動理論」において「形成的介入」と呼ばれる方法論的枠組みにもとづき、従来の教育学研究に支配的であるリニアな介入観に対して、それを根本から批判的に問い直したものである。本研究では、教師たち自身が未来の学校づくりに対するイニシアティブを発揮し、自らの学校の「活動システム」の新しい集団的なデザインと変革を生み出していく「拡張的学習」のプロセスを促進していくような新たな組織学習について、具体的なデータの分析を通して提起した。また、そうした「拡張的学習」を通して発達する、変化の担い手としての教師の専門性を、「協働して変革を起こしていく専門性」として明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、学校改革研究を、単なる観察や分析を超え、教師たち自身が実践的な専門知識や力量を協働で学習し発達させ、学校教育の漸進的な変化や改良、実験的試行やイノベーションを自分たち自身で創り出していくような協働の形成的な介入の研究へと新たに転換したところにある。また、本研究の社会的意義は、教育の現場において、実践者自らが研究者と協働して、既存の教育学にはないような創造的なコンセプトを生み出し、学校改革の今後の展望と方策に根本的に示唆を与える典型的事例を創造していくという新たな教育研究のパラダイムを構築した点にある。

研究成果の概要(英文)：Based on the methodological framework called "formative intervention" in "cultural-historical activity theory," this study fundamentally and critically reconsiders the linear view of intervention that is dominant in traditional educational research. Through the analysis of concrete data, this study posited a new form of organizational learning that promotes an "expansive learning" process in which teachers themselves take the initiative for building the future school, creating a new collective design, and transforming the "activity system" of their school. It also illuminates the teacher expertise that develops through such "expansive learning" as "collaborative and transformative expertise."

研究分野：教育方法学、文化・歴史的活動理論、拡張的学習理論

キーワード：教師教育 教師の専門性開発 活動理論 拡張的学習 形成的介入 変革的エージェンシー 組織学習 学校改革

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

学校におけるカリキュラムや授業、教育実践の改革に関する教育学研究の分野では、中央からトップダウンで降ろされた教育政策を現場がただ単に実行する、といったリニアな見方について、それを批判的に乗り越えるような新たな研究枠組みがますます求められるようになっていく。そこでは、教師を、学校における学習指導に関する新しい政策、たとえば「学習指導要領」に適応すべき完全に受動的な担い手と見るようなこれまでの枠組み（参照、Cohen & Ball, 1990, p. 335）から脱却することが不可欠である。その上で、経験や信念や知識にもとづき、改革を現場で具現化していく教師たち自身の「エージェンシー」——すなわち、行為の責任ある担い手となっていく自主的・連帯的な能力と意志——こそが、変化の鍵を握るものであることに注目していかなければならない。

そうした背景のもと本研究は、学校改革の鍵を握る教師の専門性開発をめぐり、「文化・歴史的活動理論 (cultural-historical activity theory)」（以下、活動理論という）と「拡張的学習理論 (expansive learning theory)」の枠組みにもとづき、教師の新たな専門性を「拡張的学習者としての教師／変化の担い手としての教師 (teachers as expansive learners and change agents) 」として概念化した上で、今日の時代に求められている、協働して変革を起こしていく教師の専門性 (teacher collaborative and transformative expertise) の開発について検討しようとするものである。

「活動理論」は、教育、仕事、コミュニティの各領域において、文化・歴史的に構築されてきた人間の「活動システム」を人びとがどう集団的にデザインし変革していくのかを研究する枠組みである (Engeström, 1987/2015, 2008, 2016, 2018; Леонтьев, 1975; Sannino et al., 2009; Sannino & Ellis, 2013; 山住, 2017; Yamazumi, 2021)。それは、学校教育の研究と実践を新たに切り開こうとするとき、学校での学びをとらえ、意味づけ、デザインし直し、創造していく実践に役立つ枠組みとして、現実に生きて働く理論的な手立てになるものである。

「活動システム」とは、活動理論研究の世界的な第一人者である、フィンランド、ヘルシンキ大学活動・発達・学習研究センター (Center for Research on Activity, Development and Learning: CRADLE) センター長のユーリア・エンゲストローム (Engeström, 1987/2015, 2008, 2016, 2018) によってモデル化された、文化に媒介されて対象に向かう人間の社会的・集団的活動のまとまりのことである。活動システムのモデルは、社会的・歴史的な性質をもつ人間の活動組織が、相互に影響を及ぼし合う七つの基本的な要素から構成されたものであることをとらえている。つまり、このモデルは、「主体」(個人やグループ) が「道具」(ツールや記号、手立てや方法、コンセプトやビジョン、技術) を用いて「対象」に働きかけ、求められる「成果」をめざして「対象」を作り変えていくような、「ルール」「コミュニティ」「分業」を社会的基盤とした人びとの集団的活動をとらえる概念的な枠組みなのである。

活動理論では、こうした活動システムを集団的にデザインし直し、変革していくことへの実践的な参加こそが、実践者たちの学習のプロセスであると見る新しい学習理論、すなわち「拡張的学習理論」が提起されている (Engeström, 1987/2015, 2008, 2016; 富澤, 2022; 山住, 2017, Yamazumi, 2021, 山住, 2022a)。

こうして本研究は、学校現場での教師たちの協働的な拡張的学習の生成とそれを通じた「変革的エージェンシー (transformative agency) 」の発達への「形成的介入 (formative intervention) 」を研究方法論とする教師教育の活動理論的研究を推進したものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、持続可能な学校改革の鍵を握る教師の役割に注目し、学校現場において現実の問題状況を乗り越えようとする教師たち自身の組織学習に介入することによって、変化を創造する主導的な担い手としての教師の新たなあり方を発見し、概念化した上で、今日の時代に求められている、協働して変革を起こすことのできる教師の専門性の開発について明らかにすることにある。

そのため、本研究では、(1) 人間活動の変革に関する活動理論と拡張的学習理論の枠組みにもとづき、教師の新たな専門性を「拡張的学習者としての教師／変化の担い手としての教師」として概念化し、(2) 国立大学附属A小学校と公立B小学校とのパートナーシップのもと、各校における組織学習の場 (研究会議や校内研修会) を対象に、教師たちの拡張的学習を促し、変化の担い手としての力量を高めていくような形成的介入を実施して、データの収集と分析を行うこととした。こうした研究の二つのレベルを相互に関連させることによって、本研究では、(3) 先端的で波及効果のある、教師の専門性開発に関する新たな展望と方策について提起することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、① 新しい具体的な概念の構築に向かう理論的研究 (レベルA) と、② 上からのリニアな介入とは根本的に区別される形成的介入の方法論的研究 (レベルB) にもとづき、③ 現

実の活動において実践者のエージェンシーの拡張への介入を実施する実証的研究（レベルC）を進め、三つのレベルを統合した分析を行うことを研究方法とした。さらに、それら三つのレベルの研究内容を相互に関連させ、教師の専門性概念の転換を図り、専門性開発の新たな展望と方策を発見していく研究を進めた。

相互に密接かつ有機的に関連する三つのレベルでの具体的な研究方法は、次の通りである。

#### （1）教師の新たな専門性に関する理論的研究

教師を、教育政策の完全に受動的なエージェントと見るこれまでの枠組みから脱却するためには、協働して変革を起こすことのできる教師の新たな専門性の概念化への転換が今日の時代に求められているだろう。

本研究では、そうした教師の変革的エージェンシーに焦点化する新たな専門性に関するキーコンセプトとして、「拡張的学習者としての教師／変化の担い手としての教師」の概念を構築する理論的な作業に取り組んだ。

#### （2）活動理論にもとづく学校改革への形成的介入の方法論的研究

本研究では、伝統的なデザイナー主導からユーザー主導の民主的な介入研究へと転換していくために、教師たち自身が主導権を握り、協働して変革を起こしていくエージェンシーを獲得し、高めていくような、学校現場での教師たちの拡張的学習を促進・支援する形成的介入研究に焦点を合わせ、その方法論的な原理と枠組みの構築作業を進めた。

#### （3）教師の拡張的学習と変革的エージェンシーへの形成的介入の実証的研究

本研究の実証的研究では、まず、国立大学附属A小学校とのパートナーシップのもと、現実の問題状況と格闘する教師たちの拡張的学習を促し、変化の担い手としての力量を高めていくことを目的とした研究会議を2019年度に7回実施し、そのデータを収集して分析した。この研究会議には、A小学校の副校長、教務主任・研究部長、研究部担当の4人の教諭、そして本研究の研究代表者、研究分担者2人の計9人が参加した。

次に、教師たち自身が学校づくりに対するイニシアティブを発揮していくような、公立B小学校において行われている校内研修会に注目し、2020年度-2021年度にデータを収集して、そこで教師たちの拡張的学習の生成と変革的エージェンシーの形成に焦点化した分析を進めることとした。

## 4. 研究成果

### （1）活動理論にもとづく教師の拡張的学習と専門性発達への形成的介入に関する研究成果

本研究は、理論のレベルと実践のレベルの間をブリッジする方法論（methodology）のレベルにおいて、活動理論にもとづく教師の拡張的学習と専門性発達への形成的介入（Engeström, 2016; 山田, 2022; 山住, 2017, Yamazumi, 2021, 山住, 2022b）の方法論的枠組みを構築し、提起していった。それは、次のような意味において、学校改革に関する教育学研究のパラダイム転換を果たしていくものである。

形成的介入を新たな方法論として学校現場の教師と研究者が協力して進める組織学習の場づくり（研究会議や校内研修会）では、従来の教育学研究において支配的な、教育実践に対するハイラーキカルな関係や上からのパターナリズム（「善意の改革」）にもとづくリニアな介入観が根本から方法論的に問い直されることになる。つまり、形成的介入は、直接的な「刺激→反応」といった因果図式にもとづく上からのリニアな介入のデザインに取って代わられるような教育学の新たな研究方法論となりうるものなのである。そこでは、教育学と教育研究における因果関係の説明原理として、行為者のエージェンシーに着目した階層が新たに導入される。また、活動理論的な形成的介入は、方法論として、教育学研究そのもののデザイン原理となり、特定の具体的な研究の方法（method）やデータの分析方法を選択するときの原理となるものである。

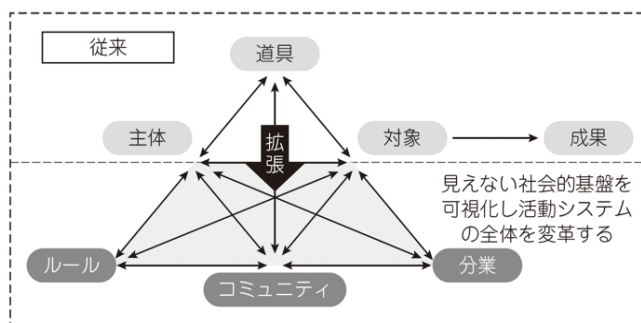
本研究は、そのような形成的介入を方法論としながら、教師たち自身が自分たちの学校づくりに対するイニシアティブを発揮していくこと、すなわち自らの学校の活動システムの新しい集団的なデザインと変革を生み出していく拡張的学習のプロセスを呼び起こし、促進・支援し、自分たちの変革的エージェンシーを高め拡張していくような、教師と研究者の協働の介入として、新たな組織学習の場づくりをめざす試みをとらえ、具体的なデータの分析を進めたのである。

日本の学校において標準的な校内研修のやり方である「授業研究」は、伝統的に、固定化された授業目標を達成するための学習指導の技術的側面の工夫や具体的な方式や手立てだけを個体主義的・技術主義的な「研修」の対象にするという限界をもっている。

また、「授業研究」がその都度対象にしているのは、ひとりの教師によって行われるひとつの教科の1時間の授業である。それは、学校の活動システムの全体からは切り離されている。

活動システムのモデルを用いるならば、次頁の図に示したように、「授業研究」は、活動シス

テムの上部にある「主体—道具—対象」の小三角形の「道具」のみを教師の学習の対象にしているととらえることができよう。そのとき、教師の専門性は、短期的な目標達成のための個々バラバラな指導の行為を習得していく「個人的に思考し行為する単独の教師」(Engeström, 1994, p. 44)というあり方になっている。



こうした「授業研究」に対して、活動理論にもとづく形成的介入では、活動システムの見えない社会的基盤である「ルール—コミュニティ—分業」を教師たちが自ら可視化して分析していきながら、学校の活動システムの個別の構成要素ではなく全体を自分たち自身で問い直し、それを構造的に形作り直していく拡張的学習のプロセスの促進がめざされることになる。つまり、特定の要素や問題、たとえば新しい「道具」としてのテクノロジーの導入だけを教師の研修の対象とするのではなく、組織学習の場を通して、学校の活動システムの全体に対して、協働して変革を起こしていく教師たちの変革的エージェンシーが拡張的に形成されていくのである。

本研究は、このように活動システムの見えない社会的基盤を可視化し活動システムの全体を協働で変革していく「協働的に思考し行為する教師たち」(Engeström, 1994, p. 44)というあり方への転換をとらえることによって、学校改革への介入プロセスの主導権を握り、自分たち自身で協働して介入を担っていくような教師の新しい専門性について提起した。

(2) 国立大学附属A小学校と公立B小学校における教師たち自身による協働の形成的介入に関する活動理論的分析の成果

本研究では、(1)で述べた理論的・方法論的な研究成果にもとづきながら、2校の小学校現場における先進的な組織学習の会合(研究会議や校内研修会)のデータを収集し、教師たちの拡張的学習の生成と変革的エージェンシーの形成に焦点化したデータ分析を以下のように進めた。

① 国立大学附属A小学校での研究会議のデータ分析

国立大学附属A小学校のケースでは、2019年度、7回の研究会議が開催された。この研究会議には、A小学校の副校長、教務主任・研究部長、研究部担当の4人の教諭、そして本研究の研究代表者、研究分担者2人の計9人が参加した。

7回の研究会議では、学校の共同研究のテーマであった「子どもたちの拡張的学習を生み出す授業の具現化」が、教師たち自身の授業実践のプランやビデオ記録を対象にした共同の分析を通じて検討・討議され、新たな授業実践のモデル化と実行、その振り返りがなされていった。

そのような連続的な会合を通して、子どもたちが学習において協働して自らのエージェンシーを高めていけるために、教師から子どもたちへエージェンシーが移譲されていくようなスプリングボードを設定する授業のモデル化が、参加した教師たちによって進められた(Yamazumi, 2021, Ch. 5)。

ここでは、子どもたちが学校において拡張的学習の主体へと発達していくこと、つまり学習活動の全体的なシステムの主体になっていくために、協働で学習活動の全体的な活動システムを創造するエージェンシー、すなわち自分たち自身の活動システムを自分たちで形成しようとする創り手・担い手としての「責任」と「権限」が子どもたちに委ねられ、譲り渡され、子どもたちの自主性に任せるといった新たな授業実践モデルが教師たち自身によって生み出されたのである。

研究会議は、こうして、教師の拡張的学習を呼び起こし、促進・支援することを通じた学校づくりへの自分たち自身による協働の形成的介入を創り出したのである。

② 公立B小学校での校内研修会のデータ分析

公立B小学校のケースでは、教師たち自身が学校づくりに対するイニシアティブを發揮していくような校内研修会に注目し、2020年度-2021年度にデータを収集して、そこでの教師たちの拡張的学習のプロセスを分析した。

一連の校内研修会は、新たな教育観や学校の未来像に関する「なぜ? ('why?）」や「どこへ? ('where to?）」を問うレベルでの対話と討議を継続的に重ねるものだった。そのことによって、校内研修会は、前述のような「授業研究」の限界を打ち破るものとなった。つまり、継続的な校内研修会を通して教師たちは、「まだない」ような学校の未来の活動システムを想像し構想し概念化することによって、学校の可能な未来づくりへと向かっていったのである(山住, 2022b)。

こうした校内研修会は、標準的な「授業研究」が「どのように? ('how?）」という個別的な指導のテクニックを問うことに限定されているのに対して、「なぜ? ('why?）」や「どこへ? ('where to?）」のような学校の集団的活動システムの全体を問うレベルでの対話と協働を創り出そうするものだといえる。

「まだない」ような「どこへ? (*where to?*)」を問い、未知の複雑な概念を協働で形成していくことは、拡張的学習のプロセスそのものにほかならない。同時に、そうした拡張的学習を通じた概念形成は、教師たちに、自分たちが学校の活動システム全体の協働的な創り手・担い手になっていくという変革的エージェンシーの形成を可能にするのである。

### (3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクトおよび今後の展望

以上述べてきた活動理論にもとづく形式的介入研究の成果は、学校改革研究を、単なる観察や分析を超えるダイナミックなものに変える可能性をもつと位置づけることができる。活動理論的な形式的介入研究では、研究者と実践者による協働の介入という共同研究を通して、学校改革に関する新たな概念や活動パターンが創造されるとともに、きわめてアクチュアルなデータが生み出され収集される。そのようにして、研究者や政策決定者の観念の中でも、書物の中でも、実験室や講義室の中でもない、教育の現場において、実践者自らが研究者と協働して、既存の教育学の内部構造を転換しうる新しい概念装置を発明し、現代における学校改革の新たな展望と方策に根本的に示唆を与える典型的事例を創造する潜在的な可能性が大きく開かれるのである。

また、実践者の拡張的学習を促進し、彼らの変革的エージェンシーを高めていく形式的介入の方法論を、教師教育研究と教師の専門性開発の分野に応用するならば、学校現場で教師たち自身が教育実践に関わる専門知識や力量を協働でどう学習し発達させ、それにもとづいて学校教育の漸進的な変化や改良、実験的試行やイノベーションを自分たち自身でいかに生み出していくのかという問題にアプローチする新たな研究領域を生み出していくことができるものと考えられる。

このような本研究の成果は、国内にとどまらず、国際的に大きな影響力のある潮流となっている活動理論にもとづく拡張的学習と形式的介入の研究として、国外においても十分に位置づき、強いインパクトをもちうるものでもある。

### <引用・参考文献>

- ① Cohen, D. K., & Ball, D. L. (1990). Relations between policy and practice: A commentary. *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 12(3), 331–338.
- ② Engeström, Y. (1987/2015). *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research* (2nd ed). Cambridge: Cambridge University Press. = (2020). 山住勝広訳『拡張による学習—発達研究への活動理論からのアプローチ』完訳増補版, 新曜社.
- ③ Engeström, Y. (1994). Teachers as collaborative thinkers: Activity-theoretical study of an innovative teacher team. In I. Carlgren, G. Handal, & S. Vaage (Eds.), *Teachers' minds and actions: Research on teachers' thinking and practice* (pp. 43–61). London: RoutledgeFalmer.
- ④ Engeström, Y. (2008). *From teams to knots: Activity-theoretical studies of collaboration and learning at work*. Cambridge: Cambridge University Press. = (2013). 山住勝広・山住勝利・蓮見二郎訳『ネットワークする活動理論—チームから結び目へ』新曜社.
- ⑤ Engeström, Y. (2016). *Studies in expansive learning: Learning what is not yet there*. New York: Cambridge University Press. = (2018). 山住勝広監訳『拡張的学習の挑戦と可能性—いまだここにはないものを学ぶ』新曜社.
- ⑥ Engeström, Y. (2018). *Expertise in transition: Expansive learning in medical work*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ⑦ Леонтьев, А. Н. (1975). *Деятельность, сознание, личность*. Москва: Политиздат. = (1980). 西村学・黒田直実訳『活動と意識と人格』明治図書.
- ⑧ Sannino, A., Daniels, H., & Gutiérrez, K. D. (Eds.). (2009). *Learning and expanding with activity theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ⑨ Sannino, A., & Ellis, V. (Eds.). (2013). *Learning and collective creativity: Activity-theoretical and sociocultural studies*. New York: Routledge.
- ⑩ 富澤美千子 (2022). 「総合的な学習の時間の矛盾と拡張可能性—教育目標達成のジレンマからの解放」山住勝広編著『拡張的学習と教育イノベーション—活動理論との対話』(pp. 46–70). ミネルヴァ書房.
- ⑪ 山田直之「拡張的学習の場を準備する『保育記録研究交流会』」山住勝広編著『拡張的学習と教育イノベーション—活動理論との対話』(pp. 262–282). ミネルヴァ書房.
- ⑫ 山住勝広 (2017). 『拡張する学校—協働学習の活動理論』東京大学出版会.
- ⑬ Yamazumi, K. (2021). *Activity theory and collaborative intervention in education: Expanding learning in Japanese schools and communities*. London: Routledge.
- ⑭ 山住勝広 (2022a). 「活動理論と拡張的学習理論による教育イノベーションの探究」山住勝広編著『拡張的学習と教育イノベーション—活動理論との対話』(pp. 2–26). ミネルヴァ書房.
- ⑮ 山住勝広 (2022b). 「教育イノベーションへの拡張的学習と形式的介入のアプローチ—協働的で変革的なエージェンシーの形成へ」山住勝広編著『拡張的学習と教育イノベーション—活動理論との対話』(pp. 27–44). ミネルヴァ書房.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山住勝広	4. 巻 第193号
2. 論文標題 「拡張する学校」はいかにつくられるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上越教育大学附属小学校内高田教育研究会『教育創造』	6. 最初と最後の頁 10 - 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山住勝広	4. 巻 第70巻第3号
2. 論文標題 教育学の基本カテゴリーとしての人間の活動 人間形成の弁証法的過程への活動理論的アプローチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学『文学論集』	6. 最初と最後の頁 127 - 148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamazumi, Katsuhiko	4. 巻 No. 4
2. 論文標題 Education as a collaborative intervention: Engaging learners and building a community of agency in disaster prevention learning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Actio: An International Journal of Human Activity Theory	6. 最初と最後の頁 17 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/00022813	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomizawa, Michiko	4. 巻 No. 4
2. 論文標題 How integrated study became expansive learning in Japanese elementary schools: The three dimensions of expansion	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Actio: An International Journal of Human Activity Theory	6. 最初と最後の頁 37 - 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富澤美千子	4. 巻 第11号
2. 論文標題 小学校教育課程における特別活動の位置と児童会活動の意義 岐阜市立長良小学校の「みずのわ」活動を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 横浜美術大学『横浜美術大学 教育・研究紀要』	6. 最初と最後の頁 65 - 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山住勝広	4. 巻 第71巻第3号
2. 論文標題 認識の学でも実践の学でもなく制作の学へ 活動理論的教育学構想	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学『文学論集』	6. 最初と最後の頁 71 - 94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00025941	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamazumi, Katsuhiro	4. 巻 ISLS 2022
2. 論文標題 Expanding teacher transformative agency: An activity-theoretical formative intervention research in school-based dialogue sessions toward future making	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the 16th International Conference of the Learning Sciences	6. 最初と最後の頁 1093 - 1096
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 1件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Yamazumi, Katsuhiro
2. 発表標題 Education as a collaborative intervention: Toward building a community of agency in disaster prevention learning
3. 学会等名 The 35th Colloquium of the European Group for Organizational Studies (EGOS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamazumi, Katsuhiro
2. 発表標題 Teachers as collaborative change agents in redesigning schools: An activity-theoretical formative intervention study
3. 学会等名 The Annual Conference of the Australian Association for Research in Education (AARE) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山住勝広、富澤美千子、山田直之
2. 発表標題 拡張的学習者としての教師・変化の担い手としての教師 教師教育の活動理論的研究
3. 学会等名 日本教育学会第78回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山住勝広、富澤美千子、山田直之
2. 発表標題 教師の拡張的学習と専門性発達への活動理論的介入研究 「チェンジラボラトリー」の方法論と方法
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 「拡張する学校」はいかにつくられるか
3. 学会等名 上越教育大学学校教育実践研究センター自主セミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 対話し協働する学校づくりにおける三つの問い直し
3. 学会等名 第6回活動理論学会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 インスタラクショナル・コントロールから協働の介入へ
3. 学会等名 第6回活動理論学会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 第四世代活動理論の展開とコモンとしての教育への転換 交換価値を超えて使用価値に向かう学びへ
3. 学会等名 活動理論学会研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 リニアな介入から私たち自身による協働の介入へ 拡張的学習と変革的エージェンシーの形成
3. 学会等名 日本教育学会第80回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 形成的介入研究としての校内研究
3. 学会等名 第7回活動理論学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yamazumi, Katsuhiro
2. 発表標題 Expanding teacher transformative agency: An activity-theoretical formative intervention research in school-based dialogue sessions toward future making
3. 学会等名 The 16th International Conference of the Learning Sciences (ICLS) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamazumi, Katsuhiro
2. 発表標題 Making an expansive school: A formative intervention study in the rediscovery and expansion of the use value of learning
3. 学会等名 The 9th Nordic-Baltic International Society of Cultural-historical Activity Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山住勝広
2. 発表標題 拡張的学習としてのプロフェッショナル・ラーニング 教師の変革的エージェンシーを形成する校内研究の取り組みを事例として
3. 学会等名 第8回活動理論学会研究大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 富澤美千子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学図書出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 「教職観の変遷」 齋藤義雄編 『教職概論 理想の教師像を求めて』（執筆担当部分 pp. 46 - 55）	

1. 著者名 Yamazumi, Katsuhiro	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 174
3. 書名 Activity Theory and Collaborative Intervention in Education: Expanding Learning in Japanese Schools and Communities	

1. 著者名 山住勝広	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 「教育イノベーションへの拡張的学習と形成的介入のアプローチ 協働的で変革的なエージェンシーの形成へ」 山住勝広編著 『拡張的学習と教育イノベーション 活動理論との対話』（執筆担当部分 pp. 27 - 44）	

1. 著者名 富澤美千子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 「総合的な学習の時間の矛盾と拡張可能性 教育目標達成のジレンマからの解放」 山住勝広編著 『拡張的学習と教育イノベーション 活動理論との対話』（執筆担当部分 pp. 46 - 70）	

1. 著者名 山田直之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 「拡張的学習の場を準備する『保育記録研究交流会』」山住勝広編著『拡張的学習と教育イノベーション活動理論との対話』（執筆担当部分 pp. 262 - 282）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

活動理論学会 <a href="http://www.jarat.org">http://www.jarat.org</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	富澤 美千子  (Tomizawa Michiko)  (90810680)	横浜美術大学・美術学部・教授    (32725)	
研究分担者	山田 直之  (Yamada Naoyuki)  (90825738)	関西大学・文学部・准教授    (34416)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	エンゲストローム ユーリア  (Engestrom Yrjo)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	リー ユージン  (Lee Yew Jin)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フィンランド	ヘルシンキ大学活動・発達・学習研究センター			
シンガポール	シンガポール国立教育学院			